向陽介護便り

平成27年2月　第106号
発行人:㈲向陽介護システムズ
新宿区西五軒町1－5　春山ビル1階
TEL　03-3267-2015

認知症が700万人超え！？

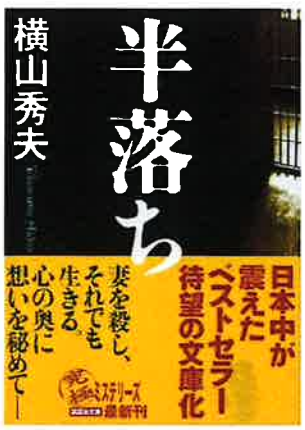
ショッキングな報道に接しました。厚生労働省が先月、認知症に罹る人が10年後の2025年には**700万人**に達するとの推計値を明らかにしました。これは、65歳以上の高齢者の5人に１人に当たる計算になります。

今後も増大する認知症に対する対応策の拡充のため、厚労省は患者自身や家族の視点を重視することなどを柱とする 国家戦略「認知症施策推進総合戦略」（新オレンジプラン）を1月にまとめ、強化にあたるとしています。

同プランでは、「認知症の人の意思が尊重され、出来る限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指す」としていますが・・・・。

向陽介護が事業をスタートした10年ほど前は、認知症の原因は脳血管障害が主流で、ついでアルツハイマー病とされていました。しかし今やアルツハイマー病が全体の7割と言われ、さらに、介護が大変なレビー小体型やピッグ病型も増えてきています。

医療現場でも日本認知症学会による認知専門医制度（約930人）の創設や「治療ガイドライン」の策定による治療の標準化に向けた試みが行われています。ただ、「診断基準がはっきりしない。医師によって診断がばらばら。記憶障害などの中核症状しか見ていない、介護の苦労をくみ上げることまでできていない。」との声もあるように、前途は多難です。

認知症を抱える家族の介護をテーマにした小説も時代の流れに併せてか、世に多く出てきています。有吉佐和子著「恍惚の人」(1972)、耕治人著「天井から降る哀しい音」(1986)、井上靖著「わが母の記」(1994)、横山秀夫著「半落ち」(2002)、荻原浩著「明日の記憶」(2004)等々。最近、『半落ち』を読み返してみました。この本はミステリー小説で、直木賞候補作にもなりましたが、結末部分（受刑者とドナーの関係）でミス（欠陥）があると指摘され受賞にいたらなかった作品です。（その後事実誤認（欠陥）ではないとされました）

あらすじは、アルツハイマーに苦しむ妻に懇願され嘱託殺人を犯した現職警官の梶、殺害状況や背景などは素直に供述するが、妻を殺害してから自首するまでの二日間の行動については口を閉ざし、取調官の刑事、検察官、新聞記者、弁護士、裁判官、刑務官がこの二日間の謎を解明しようとします。最後の章で、息子を白血病で無くした後、ドナー登録した梶は、適合者に選ばれ一人の若者の命を救います。偶然知った骨髄の提供相手に会いに行った二日間の行動であり、もう一度骨髄提供のチャンスを思い、自殺を踏みとどまり、骨髄提供者になれる51歳の誕生日まで生き延びることを選んだと結ばれています。世間では、この最後の部分が議論の対象になりましたが、私は裁判官の章が印象に残りました。元裁判官で謹厳実直たっだ実父が、アルツハイマー病を発症し、壊れた実父とその介護でやつれた妻を抱える藤林裁判官。その彼が梶に投げかけた思いが「果たして介護の手を尽くしたと言えるのか」残酷な思いだと感じました。小説の中だけに留めて置いて欲しいと思います。